
幽霊少年

青草 心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊少年

【Nコード】

N4059D

【作者名】

青草 心

【あらすじ】

深夜の某小学校で”隠れんぼ”をしていた5人の子供達。次々とメンバーが見つかってゆく中…、1回目の隠れんぼは残り1人を探し出す事で終わりを迎えようとしていたが…！？

（前書き）

タイトルが何だか気味が悪いと思われる方もいらっしゃると思いますが、決して怖いお話ではないので是非とも一度読んでいただきたいと思います。見終えた後、なにかしら得るモノがありましたら、嬉しく思います。

…カッン…カッン

誰かの足音が聞こえる

…カッン…ガラガラ！

誰かが僕のクラスのドアをあけて入ってきた

一瞬、閑と静まりかえったかと思うと再び誰かの足音が聞こえ僕の隠れるロッカーの前でぴたりと止んだ

「見つけた！」

”誰か”の正体は僕の友人の”裕人”だった

僕は一番最初に見つかったらしい

これで次の回は僕が鬼決定だ

今、僕達5人は深夜の小学校で”隠れんぼ”をしている

別に不良少年などではないが、夜の方が昼間に集まってする隠れんぼとは違ってスリリングで面白いだろうと”愛美”がリーダーシップをきつたのだ

他2人の名前は”学”と”悟”で低学年の二年生だ

高学年の僕”真也”と裕人と愛美の3人が皆5年生でそれぞれ別々のクラスにいる

とにかく僕達5人は仲良しである

いつから仲良しだったかはあまり定かではない

そして1回目の隠れんぼはまだ見つからない愛美を探し出すことで終わりを迎えようとしていたが…

「あれー？おかしいな…どこに隠れたんだ愛美のやつ」

鬼の裕人は愚痴をこぼし、そろそろと僕達3人のいる玄関口へ帰ってきた

「どうした？まだ見つからないのか…愛美…」

少し心配になった僕は、皆で手分けして探そうと提案する
しかし学と悟は何故か浮かない顔をしていた
だが、しばらくして頭を縦に振った

「…ああ、分かった！それじゃ皆5分後に、この玄関に集まろう！
それでも愛美が見つからなかったその時は…」

そう言いかけて裕人は階段を上にかけてあげたっていった

「お兄ちゃん、僕らは体育館と倉庫の方を見てくるよ」と、学と悟
は走っていった

その振り向き際に悟が何かをつぶやいていたように思えた
ハッキリとは聞こえなかったが

「お姉ちゃんは、かえったんだ…」と

僕は愛美が隠れんぼを始める前に言った一言を思い出していた
ちよつと前から気にはなっていたのだ

それが何を意味するのか、この時はまだ知らずにいたのだが…

『屋上に隠れるのはナシね』

ハア…ハア…ハア…

僕の足は自然と屋上へと向かっていた
もしかしたら屋上に愛美はいるかもしれないと…
もし、そこに愛美がいるのならば

「言いだしつpegルールを破るな」と、本人に直接いつてやろうと
思ったのだ

そして辿り着いた最上階…

屋上の扉には大きな文字で”立入禁止”と書かれていた
けれど鍵はかけられてはならず、僕は自然とその扉のドアノブに手
をかけた

何かに引き寄せられるように…

バン！という音が屋内に響くほど勢いよく扉を開けた
しかし、そこに愛美の姿はなかった

一目で分かった

そこには何の死角もなく、隠れる所すらないことを…

でもそこには”一輪の花”が挿してある小さな花瓶があつた
嫌でも目に入った

それはこんな闇の中でも白く目立っていた

”何故こんな誰も入らないような場所に花瓶があるんだ？”

僕は不思議に思った

ふと気が付くと僕の後ろには学と悟、そして裕人の3人の姿があつた

「見つかったか？」

「いや、どこにもいなかったよ」
「学がすぐさま返事を返した
すると続けて学が言う」

「さっき悟と話してたんだけど、もうかえったんじゃないかな？」

「ああ、そうだな…もう時計の針も2時をまわってることだし、家に帰ったのかもな」

『？』

「愛美のやつ帰るなら帰るって一言、皆に言ってから帰れっていうんだよ、なあ皆！」

僕がそう言った途端、その場の空気が一変した

どうしたんだろう…？

3人共、困ったような表情を浮かべている
何かおかしい事でも言ったのだろうか…

「なあ、皆…！」

僕がそう話しかけた瞬間、さえぎるように裕人が話し始めた

「真也、お前…気付いていないのか？」

？…何の事を言っているんだろう…裕人のやつ

「愛美は…とつくの昔に死んでるんだ」

「!？」

何をバカな…

僕は裕人の話を信じられずにいた

続けて裕人は言った

「愛美だけじゃない！俺も悟も学も…！真也！お前も…俺達全員死んでいるんだよ…！」

!!？

裕人の信じられない話に耐えられなくなった僕は話に耳を貸すどころか、裕人の襟元に掴みかかり怒鳴った

「い、いい加減にしろ…！そんな事、信じられるか…!!」

…すると裕人は僕の額に優しく手を置くと話を始めた…

俺はいつも1人だった

友達も作れず、遊ぶ時も1人、寂しかったんだろうな

そんな自分に嫌気がさしてきたある日…俺は自分の部屋から新しい世界へ飛び立ったんだ

その日、俺は自ら命を断った…

それから真夜中になると、自分と同じような理念を持ってこの世を去った者同士が校内で隠れんぼをするようになったというわけだ

「お前もそう願ったはずだ！思い出したる？自分の命日を」

そんなの思い出せるはずがない！僕は死んでなんかいない…僕が幽霊であるはずがない…！

僕は心の中で否定していた

自分が死んでしまっている事を

自分が幽霊である事を…！

僕は少しずつあの時の事を思い出していた

僕がこうなる前のあの日の事を…

あの日…僕、真也は…！

放課後、僕は誰もいなくなった教室で1人佇んでいた

…綺麗な夕日がさす屋上…

僕は学校が終わると必ず其処にいた

いつも其処には白い一輪の花が挿してある小さな花瓶が置いてあった

” どうしてこの花は、いつも枯れずに咲いているんだろう？ ”

日に日にそんな疑問が僕の中で膨れ上がっていった

その次の日、花の枯れない理由が分かった

その花は僕の担任の先生の植物状態で眠り続けている娘さんへの願掛けだった…

毎日、先生が新しい水と花を持ってきて替えていたのだった

先生は僕に言った

「花も人間も、常に咲き続けるという事は難しい…、けれど自分を大切に思ってくれる人が1人でもいれば、枯れてしまったときも一

から咲き直す事だつて難しい事じゃないんだよ」

そう先生は言い、僕はそれが正しい事だと思った

それから数日後、僕が屋上へ行くと驚くような光景を目の当たりにした

…僕のクラスメイトの桜木が他のクラスの男子数名に柵外へ出るよう脅され、今にも落とされそうな勢いだ

僕が今出ていって止めれば、桜木は助かるかもしれない…でも今度僕が奴等のイジメの標的にされるかもしれない…

そんな一抹の不安と恐怖が僕の一步を踏み留まらせていたが次の瞬間、何を思ったか奴等は先生の大事な娘さんの花を花瓶ごと上に持ち上げ、おもいきり地面に投げつけて割った

奴等のそんな思いがけない行動が僕の臆病な心に火をつけた

「やめろよ！桜木をイジメんのも…！その花に触るのも！」

そんな僕の怒鳴り声に驚いたのか、奴等はポカンと口を開けたまま僕の方をしばらく見ていた

すると…奴等の1人が少し引いて、愚痴る

「何だよ偉そうに…、同じクラスの友達もつukれない幽霊少年のくせによ…！それにたかが花の事で怒るなよな…！こんなやつら放って行こうぜお前等」

奴等は、その白い花を地面に放ると屋上から去っていった

「ふうー…」と僕は息をはいた

…何とか花は無事みたいだな…良かった

その時、僕は久しぶりに心から笑えた気がした
そして僕にとって嬉しい出来事が起きた

「ありがとう助けてくれて」

その言葉は桜木から僕に向けての言葉だった
今までの1人よがりで自分勝手な僕を変えてくれるそんな出来事だった

僕は生まれた時からずっと親に見放されて生きてきた
そのせいもあってか、激しい人間不信に陥り、今までずっと友達をつくる事を避けてきた

…でも今、やっと分かった気がする
” 相手を知ろうとする心 ”、” 自分を分かってもらおうとする積極さ ” が僕には必要だって…！よし…！

「待ってる、桜木！今そこから出すの手伝ってやるよ」

「うん…！」

ヒュ…！

その時、柵の上によじ登り手を伸ばしかけていた僕は、桜木の手を掴む寸前に吹いた”死の風”によって体を押され…5階の高さから地に落ちた…

やっと…前へ踏み出そうとしていた時に…！あれはそう…僕の死因は事故による転落死…

「う、うそだ…そんなの嘘に決まってる…！これから…これから、たくさん友達を作って、あの後、桜木とも友達になって…！これからだってゆうのに…うわぁー…！！」

僕の泣き声が屋上に響いた

裕人はそんな僕に手を差し伸べて言った

「そつだ…俺達だってこれからだ、死んだ者同士仲良く友達を大切にしろって、きつとそれをかえっていった愛美も望んでるはずだ！」

「…？」

愛美…？そついえば、この名前…どこかで聞いたような…

「…！？」

なんだろう…、今どこからか声が聞こえた気がした

僕はそのかすかに聞こえてくる声に耳を傾ける事にした

『真也…生きて…生きたいと強く願うの！その子達に惑わされてはダメ！』

”え…！？”

続けてその声の主は言った

『その子達は結局…生きる事から逃げている臆病者よ、でも貴方はその子達のように自殺を図った子とは違う！あの屋上から落ちる寸前に、貴方は正直に自分と向き合い新しい道を歩もうとしていた！その気持ちたちが今も貴方の心に生きずいているのなら…生きなきゃ、ダメよ！私達のようにならないで…！』

それだけ言い終わると声はスウーッと聞こえなくなってしまった

…なんだかよくわからないけど、先程まで絶望に満ち溢れていた心もそのおかげで、光にも似た希望のかたまりで再び構成されていくのが分かる

そして僕は強く念じた

何よりも強く

誰よりも強く

今までよりもずっと強く…”生きたい”と…！

そして僕の目の前視界がまばゆい光のベールに包まれた

「……………」

ザワ…ザワ

なんだか僕の周りが騒がしい…？

「……………」
ピ…ピ…ピ

少しずつ意識がハッキリしていくのが僕には分かる…

「奇跡です！…意識が戻りました！息子さん助かりますよ！」

僕が最初に聞き取った台詞は担当医の歓喜の一言であった
気付くと、そこは小さな病室の片隅…

僕は生きていた

その後、僕の体は順調に元気を取り戻していった

後に聞いた話だが…僕はあの日、屋上から落ちたものの…木の枝が
クッションの役割を果たし、奇跡的に即死は免れたそうだが
けれど、5階の高さから落ちた事もあり、深い昏睡状態が3日に渡
り続いたのだという

そして偶然にも僕が運ばれた病院の同じ病室には、担任の先生の娘
さんもいたという

僕の意識が戻るつい3時間前までは…

長きの療治に耐えてきた娘さんは、植物状態のまま…先生の願掛け
のかいなく、この世を去った

その娘さんの名前は”愛美さん”だった…

もしかしたら僕が昏睡状態の時にさ迷っていたあの学校の姿は”生

死の狭間”の見た幻だったのかもしれない

それにあの声の主はきっと...

【END】

（後書き）

初の投稿であります。皆様に、分かりやすく読んでいただくために私なりに努力しました。ご感想の方をなにとぞお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4059d/>

幽霊少年

2011年1月16日09時25分発行